

レポーター：五十嵐さんこちらの作品はどういった作品なんですか。

学芸員：今度はこういった立体作品です。

レポーター：天井から同じ人形達が吊るされて。

学芸員：吊るされていますね。これはインドネシアの作品なんですね。ヘリ・ドノという男性の作家が、1991年に制作したバッドマン。バッドっていうのは悪いということですよ、マンは男、まあ人間で、悪党という風にアジア美術館では訳しているんですけども、悪党達がずらっと並んでいるというものです。

レポーター：一見、口開けてなんだかかかわいいなと思ったんですけど、よく見たら、手には銃を持ってるし。こっちには、なんですか。

学芸員：刀。

レポーター：刀。

学芸員：うんー。持ってますよね。人殺しの道具を両手に持って。

レポーター：なんか大きな口を開けて笑いながら。

学芸員：顔はかわいいけど、実はそういう人を殺すような武器を持っているんですけど、自分は正義のヒーローだ。悪い奴はやっつけられなきゃいけないんだ、っていう風な回路を実は埋め込まれているので、このところを見ると。

レポーター：お腹のところみんな。

学芸員：なんか電子回路みたいなのが入っていますよね。なので悪い奴はみんなやっつけられなきゃいけないので、後ろの人は前の人をバンと殺す。でその人はさらに前の人を殺そうとしていますね。

レポーター：しかもですね。よく見ると、手にコインですか。こうみんな埋め込まれているといいますか持ってていいいますか。

学芸員：そうですね、悪い奴だといっても悪い仕事をしている人じゃなくて、普通に私達自身の中にも悪い部分って、すごい貪欲な部分とか、お金がもっとほしいとか、あれもこれも買いたいとか、そういう風にこう強欲になってしまうところって。あると思うんですけども、そういうものも、ヘリ・ドノはこの作品の中で、こういうお金を持たせることで、ほんとにこう悪いことをしている人だけじゃなくて、私達の中にもそういうものがあるっていうことを示そうとしてるんじゃないかなと思います。その回路も一個ずつ全部同じなわけではなく、1個ずつ違うデザインが。

レポーター：ほんとですね。

学芸員：うん、なっていて、あと形もだいたい同じだけどちょっと手の形が向きが違っていたりとか、そういうところに手作りらしさみたいなのところが残っていると思いますよ。あと、ちょっと影がね、きれいにこう見えていると思うんですけど。

レポーター：はい。

学芸員：ヘリ・ドノという人はインドネシアの首都がジャカルタというところにあるんですけども、ジャカルタからちょっと離れた、ジョグジャカルタという古い町があるんですね。日本でいうと京都みたいな感じなんですけど、まあ文化がすごく豊かだといわれているところで、そこの美術大学を出てるんですね。で、そのジョグジャカルタでは影絵が有名、ワヤンという影絵があるんですけども、インドネシアに昔から伝わっている影絵の伝統技術というかそのアイデアを自分の現代美術の作品の中に取り込んで、制作をしてるんですね。なので、こういう影をちょっと意識して、で、この人間もほんとだったら、お腹が出てたりちょっとすると思うんですけど、立体的っていうよりもちょっと、平べったく、影絵の人形みたいにして、作っているんです。そこにはちょっとインドネシアらしさというものも意識して作品制作をしてるということが伺われると。

レポーター：うーん。影絵にすることでもっと人形が、たくさんいるように見えますね。

学芸員：そうですね。そうですね。

レポーター：一番端のお人形だけが、逆を向いてるんですよ。

学芸員：そうですね。ねー。えっとここまでは後ろの人が前の人を撃って、前の人また前の人を撃ってって、ずーっと前の人をまかしてきたんですけども、一番前まで到達したら、今度やっぱり逆の方から、やっぱりそうやってきた人と撃ちあうことになってしまう。

レポーター：んー。

学芸員：なので、正義とヒーローは勝とうと思ったけど最後いなくなっちゃいますよね、これじゃね、両方。どうしてですかね。前の人をどんどんどんって殺していこうとして、俺こそがヒーローだってやってきたんだけども、でも向こうからやっぱり同じような考えできた人とぶつかってしまうのかもしれないですね。やっぱりなんかこれも 90 年代初頭の作品ですけども、まあアジアのこの時代の 90 年代の作品っていうのは、その社会が持っている問題とか、政治の問題とかっていうのを皮肉ったりとか、どういうところに問題があるのかっていうのをちょっとこうユーモアとかを交えながら、鋭く指摘するっていうのも、傾向としてあるんですけども、イリ・ドノはその能力に長けたインドネシアの現代美術を代表する作家の一人です。

レポーター：ふうーん。